

方諸
言國

物類稱呼

言語

五終

W52-5

Ko 85

5



~~22392~~

22710

!

と云 知音の三字ハ伯牙 鍾子期の故事ニ出 長崎のそ。志んもころふ 想思を原 志ん冒り 因如九中そ。がら

と云九及及中ふよて。ちうつと云もつそ人お路て對面とると近づきよぬ

と敵いもどしてふ。とよやると云産摩よそハ女色とちうづきと云男色

を念者と云去作そもちうづきと云河と能らふ之奥及よそハ。なるびとらふ

南如そハ。けいやくとらふお秋田と。んれづと云江戸と。いらと云。志也

り孫と云又念頭も者まらハ法國の通言也と云ハ **經文** 通女曰色と

もそにうり次又ちやうねと云河ハ五六十年來の流言歟又志ん孫とハ執

念の轉後アズ。又男女交合と云ことと信也そハ。孫つれると云と意そ

ハ。めが。い。ふ。よ

○呵らと。ころ。あ。の。よ。も。あ。そ。が。ら。ち。と。云。産。摩。よ。そ。が。ら。ち。と。云。何。と

そハ志んら 犯ほよそ。と。ら。る。と。云。房。徳。也。と。云。志ん。と。云。尾。及。と。云。志ん。と

と。め。と。云。志ん。と。汗。面。と。書。時。ハ。音。結。の。あ。ら。に。す。め。れ。た。と。め。ハ。わ。後。と。り。又

○あまのふり事とふりにてのふりこにむかひまじりるもふり東國まで。○さういひて
又んがむらさき房総海まで。○さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

○久しにたいていむらさきと出物まで。○よりなるころふ
世道と 久しにたいていむらさきと出物まで。○よりなるころふ
こころいひ又あつとむらさき 但し多い又むらさき 久しにたいていむらさきと出物まで。○よりなるころふ
むらさきと出物まで。○よりなるころふ
むらさきと出物まで。○よりなるころふ

○あまのふり事とふりにてのふりこにむかひまじりるもふり東國まで。○さういひて
又んがむらさき房総海まで。○さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき
さういひてむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

宇治拾遺

無天骨とむ成人曰東風は別谷

色に似る 萬葉小と古里とも又古今集

いそひつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ

○あそこつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ
こねいとも尾あそこつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ

按よそこねいとも尾あそこつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ
のちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ

○あつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ
がいふいとそ九尺まであつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ
又あつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ
あつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ

○出るといふと出羽の秋田或は北も又家名としてあつゝのちかきつゝのちかきつゝ
あつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝのちかきつゝ

あつた又でござるにハ出るの上畧をてと行一りも書かしてのづいんたにハ出
 人かと云事一なり又肥前及薩摩をてててててててててててててててててて
 遠江もてゆびとてててててててててててててててててててててててててて
 道中もててててててててててててててててててててててててててててて
 人の書ふにうきうき又妙とててててててててててててててててててて
 ○よゝと云事と記はあて。よゝと云事接して。ぶもとててててててててててて。

撰集抄

萬葉

○よゝと云事と記はあて。よゝと云事接して。ぶもとててててててててててて。

○又東武まては東のあたる物より一々まて女の国はよき一々まて
又まての国より一々まてのまてまて

○まてのまてのまて東國まて。らりちまてのまてまて。らりちまて

東まて。らりちまてのまて然まて
らりちまてのまて

伊勢物語

ふぬまてまてまてまて

ぬぬまてのまてまてのまてまてまてまてまてまてまてまて

らちまてまてまて又らちのまてまてまてまてまてまてまて

まてまて又故まてまて禪家のまてまて

○まてまてまてまて東まてのまてまてまてまてまてまてまて

からまてまて東武まてまてまてまてまてまてまてまてまて

物をまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

まてのまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

○東まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

○葉よきとよふのや、降るてつさまとのよ東なるに、あるまゝの物ら
河まて東の邊とさうりたて、又いふ所そ日のくれば、いさ日くれたるよ
日のさるる後の略をりう、つひ縁さの寂いさざどのさも有候なるん
他一物落なるも也

○衣たふとふりて武之秩又そ。ゆよ。と云。奥みまて。鑿の
於榎方と云。葉に止落きて石工の云むせしゆも

○はらせといふ河を大坂そ。をかをそと云。からせはさう勢せとら河の。あまて。く
せと云。いふまて。のよ。せと云。羽み秋田そ。の。ゆらと云。尾流そ。い。せ

と云。萬葉ハ鹽ハ染ハ而ハ於ハ已ハ勢ハ多ハ流ハ又ハ菅ハ公ハのハ御ハ哥ハに

東風吹ふあひひか、せよあめのたと郷、せは給ふ又源信綱信る
に物をかりてるすぬを横に移るといふ、かひといふの裏もあ、一とのま

○くらとといふと云。神代卷 養老と云。出おそ。けらと云。くれうくれのな。又。けられかたり

けりうらふもつよ 業にくらふと云自遣う但有^{アレクサレ}下と畧して **クダレ**

又略して **クダレ** 又畧して **クレ** となりたる例 他より系れ **徒然草** あつらふ

よ記友らつまに物くる友と云又 **十訓抄** よ云むし一筆縁なる法

師人の伴まで物こひなるに東行して居る人におひいどおおもてよ

あるひに時く物ぞとせられハ

「*あつらふ*」とて物のり「*あつらふ*」とてたのじく「*あつらふ*」ハ

とありたると云又芭蕉翁あつらふの寸む夜よ

「*あつらふ*」と云ふの月の露

○おふるの志事とらふ事と上縁まで。あんどちよと云會津まで。あんどちよ

びりちよと云ふと云何ぢやと **ちよ** 何く **ちよ** 何く **ちよ**

と云何く **ちよ** と云何く **ちよ** と云何く **ちよ** と云何く **ちよ**

奇よらあるも志事とらふ河より長門又ハ土居の山家まで何ちよと云

又事らばと云ふと京近をぬきまてハ何の事らばと云ふて云尾の道

よて何の事らばと云ふといひ東國までハ何の事らばと云ふて云是等の

と云ふと云ふれ相違ハ風土のなるハ一也

○たのふらふといふ河のかゝるもよと云ふて。ろゐのなる云 棠よ魯擢ハ

僕に社の具色曾補好忠のゆらの戸をける船人カガをぬえ行出

りまぬと云ふ一奇考合まて一

○ある河を云ふ事と長崎まで。あるなるせん云

○くさびまこといふ事とまがしとハ山伏の入津修り 或内まで。ちんご云ちんごの修り

らハ辛伊勢まで。ざんかうまけと又いごうまけと云薩まで。ならんと

云東國まで。かつさるいと云又ごらつとも云 但來翁のこころと困

の字なり田更人こちと云ふと云又肥前の佐賀まで。ぬいのご

と云ふ

○打擲うちなげきとらふ事を犯前の平戸まで。とらふすころは同を依頼しては
 けくみうをせと云はくみうと云ふ憲あつたまの事といふをいふおきて。これつひ
 ると云犯後まで。まじつとらふ 良基公 **袖葉日記** 云神人といふ
 うらちをうらむと有志をいふ人をいふとらふもいふ徳杖持おとにてお
 とらふくぶつといふ法を道といふうらむといふの義こがににてお事成
 ○此やうに筆をいふ事をいふ大和及伊賀伊勢をいふ。あづくと云ふ
 かくと云ふうらむに居るをいふ大和及伊賀伊勢をいふ。あづくと云ふ
 邪まで。とらふびくかくと云ふをいふ。あづらかくと云ふ越おきて。あづ
 と云犯お友薩摩まで。いづらうことといふ犯後まで。いづらうあづら
 案にむやうらくと云ふ截きり六也亀の首尾をいふのつとをいふは似るかかと云
 けくみうをいふらハ特修とくしゆ **和漢三才圖會** 帝樂ともいふえらむと又あづらと
 云ハ脚也 **ソラ**ハ坐也 **日本紀** 跌坐てつざ修しゆで **うらちあづら**と云ふやう

勿負なげ舟ふね手て

ハおつてー也あつてはあつてーの勢ーの河も也

○ 尾山に降りて中を渡り及北前まで。さざしむる尾山に降りてはあつてー

○ 明日は後日と申すと播磨赤穂まで。あつてとあつて知つて

この赤穂浪をれハ日ちよかれと候ていふはうへー
去依つてさのうへりゆつたをいふも是に因りて

○ 西海へんとして日ちよなりつと赤肉近頃にして。日ちよなり

東國まで。係ひのうへり

○ 日ちの言らぬと尾張まで。一あ日ちよ尾張まで。一石日ちよ

今按に尾張まで純くーなる日ちよと申すはあつて

一あの日ちよ又二日ちよと申すはあつて

降つていふはあつて十六夜日記 阿伴の程次

「今ふつてくたわれる魚のていからさつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

又天正文祿の辰曾呂里新左衛門と云者も泉及堤の位まで轄領之
細工の急ぎをゆたかり力の頼りとする事と物をもつて異名を太閤
秀吉公朝鮮征伐の事から二首の落首をとてたてり

「右首が二石をもちて賞しうりてさきもいあまも伊波海

又江戸に二石橋と云者 江戸砂子 小後及氏のお家かの橋の元後にを
故に二石橋と云くともこれ皆同日の法あり

○よま羞明と云ふ事と中國まで。まがしと云江戸まで。まがしと云あま
まのまがし海に云はる尾張田まで。かまあしと云土佐まで思ふ事など
。ぼりひと云 たの浦まはまの橋

○あまらしと云ふ事と相違して。あまらしと云たよの形をさしあま
ふ後及那州と云。上野まで。あまらしと云たよの形をさしあま
らうぬくと云ふを肥後まで。らうぬくと云ふ 古代の

○律義が多人を申す。また友人及東家にて。またたうと

と云 葉に **サキ** 人又 **また** くと **たに** 今人 **と云** ひと **萬葉** **全** 手と云

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

○また右のよけ事を諸手と書り一同抄に又えり。これ別なり

下野の方言と傳ふる事ごとくさくさくといふやうな所とハなれども傳へて来
 るは「河」が「やちあひ」の「まやち」に傳ふるハ居るといふ事也又「か
 がと」にて云むお代河の出所の尾は「流」と云はれぬの意向もさういふや
 又「集白集」云小田原と云所の宿よと傳るゆれを「お」の「お」の「お」にて
 終めくその「河」をよとてさくさくといふや「あ」の「あ」も「あ」の「あ」にて
 終らに「い」を「い」められぬとあつちあつちも「あ」の「あ」にぬる「あ」
 とけぬ事お傳へて今さう「い」を「あ」にぬる「あ」の「あ」の「あ」の「あ」
 うんとてらあるはうううういひうひて「あ」の「あ」の「あ」の「あ」の「あ」
 終まる「い」の「い」を「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」
 ○さういふ「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」

へとも知らず古くは「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」
 るものやうして團體物の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」の「い」

おど教ひて

「おめいお梅おらるゝお我をどうと見も人のおにともえ

し寿のおとんこへおあめいおしおる同と云 **万葉** 壽とあつ

○めでたきとて泪のおとりに長壽あまて。けいんといふと云 今梅にふらけん

と、お歡と書もや又めくおらるゝにおまおぬれとていふ梅おてけ

とことしお寿のおめておれおむのうと花と書しつらのおと肖柏を人の後と

めでらめいおらるゝおむ同らん又城の字あつしとよむおらてししの持傳あ

○嫁とらるゝとお娘及修徳あまて。むさしとて壽をまて。御前ごぜんおひと云

葉よむさしおらるゝおれちがらるゝ河あるべし

○夕ゆふと東國の初よよんご云 夕葉に **遊仙屈** 宿 **ヨベ** **ヨンベ** 夕何と云

萬葉 大伴 郎女 孫に

「あまさうらつひする君ハ久このよん登のあふらりよらんり

土佐日記

舟子のうふうによさぬのうあひもかまひもぶるとも又今夕を
ゆべとの六勿論の事にて昨夜の事とせんぬと云系系おの奇きき土佐日記
に云えぬもわおの半とぞいも又二部おののよたのあれ晩とのハ
是う此奴又人の身事とぞとら六法釈とぞもんもるハ法登らる
若黄昏ハ誰彼之曉又ハ彼誰くもていもあぬあさく

○他人を就定とらと事とぞ急と。ちとあくとらよ

○醜さ女を憐る河におあまて。ゆりともげつと云東國を後立船と。

あつてうづくと云 袖中錦 云胡國の婦人黄色の袖とて雨よ流るこれぞ

佛粧とらと云又佛頂面と云面とて螺髪と云るがあくと云たよと云

とらよ又東國の俗人に對するにわさざらとぶめんさうとらよハ 金剛經 小

無人相とありはらりなりとぞ

○おめ兒さげぶと云河のうらるとに九州及四島と。おららぶと云 神代卷 哭

夫木
あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

ゆふはれもあまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

あまのいひのむらさきをいふもあまのいひのむらさき

源氏
たどけら

せらからいささか戸尾法也及と申せし。○万八もいふを年のイサヤルぬきて
 ○せらごとと又赤袖とらふいささか又。千せんともいふとぞ按に千の依の周
 実まことともわんといふとさうや百といふも流言も是に似る事なり
 又いささかいささか見はうそなるは難ちがれかくともいささかといふもいささか
 ぐの合ぬ加口の合なるといふとらう **萬葉** ニ手習やまに今と宇習也
 ○やくたいもなからいささか東の南部とて。○さびたといふ
 ○いささかいささかいささか伊勢とて。○さびたといふとていささかいささか
 されたりよ 葉よま依とていささかいささかいささかいささかいささか
 あれあう縁ありていささかいささかいは是もいささかいささかの縁とていささか
 とう又わびたといささかいささかいささかいささか
 いささか

○さびたといふ伊勢とていささかいささかいささかいささかいささかいささか

石上宮のまの庭にふりどりまにともなる月日のかたうやまひよ 西上人

○かたれんが おんめい せきまて。かまごごとと云相控まて。かたれんが おんめい と

○之種念まて。かたれんがと云仙基まて。かたれんがと云

○鬼にー せきまて。鬼にーと云京まて。つらまてと云大坂まて。むろ人が

○らふ東園及出雲口又犯しを流まて。鬼ごとと云奥仙基まて。鬼くと云

津野まて。おろごとも常陸まて。鬼のこらと云

○他の呼に答は語 言ふまて。あいと云美因まて。さりと云出羽まて。結い

と云長門まて。あつしと云常陸まて。さりと云犯前まて。ないと云

○古伝まて。あいと云 又あつしと云奴僕めい 成後まて。かいと云成前まて

○芥と云隆興まて。かいと云

○あつしと云河大い同くしてかく異と云る各物語なるべ

○省中にならぬと云は流まてと云る流あつしと云る流まてと云る流あつしと云る流

物類稱呼卷之五

二篇
三篇
近刻

安永四乙未正月

江都書林

須原屋市午衛
同 善五郎

物類稱呼卷之五終

~~22382~~

22710

国立国語研究所



1001089836